

総合科学部フレッシュ・キャンプ

総合科学部

1泊2日

V
S

2泊3日

平成四年度コース委員会委員長 嶋屋節子

学部単位のオリ・キャンの実施に関して、総合科学部ではコース委員会が検討した。昨年九月からコース委員会代表は学生の意向と計画について学生組織委員と話し合い、彼らの積極的な姿勢を確認した。十月から十一月末まで当委員会では、平成五年度新入生向けの全体的オリエンテーション行事の内容について検討を行い、オリ・キャンを学部の公式ガイドス行事の一環とする事を最終的に承認し、次いで教授会での承認を得た。



次の問題は企画の内容である。企画は原則として学生の自主性に任せることになつていた。だが、学生の提出した企画は、内容全体に「遊び」が多すぎた。コース委員会としては、背骨の通つた企画の必要性を主張。そこで改めて教官と学生の合同企画検討部会ができた。その結果、第1日目の企画①と②は教官主導で行うことになり、責任者も決定。同窓生参加の呼びかけも決まり、事実、実現に到る過程で先ず難航したのは日程であった。学生と学活・コース委員会の教官数名の話し合いの場で、教官側は一泊二日を、学生側は二泊三日の日程を強く主張し、一步も譲ろうとしない。その上、学生は実施日をキャンプ場の都合で五月一日から三日という時期に設定した。交渉は難航し、座礁寸前。その事態を救つたのは、戸田学部長の鶴の一声であった。「学生がやりたい事はやらせたら良いではないか。」かくして教官組織委員会は学生の提案を了承するに至った。

当日は五名が外部から馳せ参じて、企画を盛り上げてくれた。

最後の課題は教官参加の呼びかけ方であった。原則として参加は自由意志に任せてあるが、多くの教官が参加やすいよう、日帰り、一泊二日、全行程の三タイプで募り、結果的に四十名近くが参加し、それぞれに笑顔で帰途につかれた。

「オリキヤン」は必要!?

総合科学科四年

上小城 敬幸

オリキヤンの是非が毎年問われ、とうとう全学のオリキヤンは廃止されました。我が総科では学部行事としてこれまでのオリキヤンメリットを十分ふんだんで「総科フレキヤン」を実施したのです。ここで私は声を大にして言いたいのです。「やはりオリキヤンは必要だ!」と。例年「あのバカ騒ぎは…、コスチュームは…、アカデミックな要素は…」等々、批判をされる先生方もおられます。ではなぜ学生達からは大方の支持を受けるのでしょうか。それは普段の生活から離れた場としてのキャンプそのものがオリエンテーションの役割を十分果たしていると思えるからです。寝食を共にし、一つの空間に集うこと自体にフォーマル、インフォーマルな情報を体得する要素があるのです。そして、準備期間のコスト

の事柄を創りあげる過程や、見ず知らずの仲間や先輩と交わしていくことを通して新入生は自己開示を徐々に行つていくのです。学問のオリエンテーションはキャンパス内でも可能です。しかし、人間交流や精神面でのオリエンテーションこそオリキヤンの役割だと私は確信していますし、それは学生達自身が一番よく知っていると思います。準備期間、そして当日に見られる新入生の輝いている笑顔が事実を物語つていると言えるでしょう。

「やはりオリキヤンは必要だ!」と。
(フレキヤン実行委員長)

フレキヤンを終えて

総合科学科一年

石川千穂

二泊三日のフレキヤンに、大学にまづ慣れていない私は、期待と不安が五分五分の気持ちで参加しました。最初

